

## 目録の作成と近代中国研究室

市古 宙三

私をはじめアメリカを訪れたのは1955年のことである。そのとき私は、「アメリカってとても便利なところだ」と思った。どこに行ってもカフェテリアというのがある。ここでは一言もしゃべらなくても、立派(?)に食事ができる。英語の下手な私がアメリカの生活を一年にわたり楽しむことができたのは、カフェテリアのおかげである。万事がこの調子、それは学問の領域でも同じである。入門書や目録・解題・索引といった便利なものがそろっていて、何を研究し、調査するにも、誠に易しい。

ある日、あるイギリス人の学者が私に、「お前はこれからロンドンに行くそうだが、イギリスに行けば、お盆をささげ持って食事を自分で運ぶような真似などしなくてすむ」という。ヨーロッパ人のアメリカ文明に対するはかない批判であろう、カフェテリアの好きな私にはピンと来なかった。

しかし日がだんだんたつにつれ、余りにも便利なるが故に、その便利さにだんだんと抵抗を感じるようになった。カフェテリアにおいてではなく、入門書や目録・解題・索引の類においてである。もともとこの種のもは、研究者がそれぞれそのテーマに応じて、自分で苦心して作るべきもので、事実、私たちはこれまでそれをやってきた。ただ作ったものを公表しないだけである。そして同じテーマに対してであっても、個々別々に作られた目録・解題・索引は結構ちがっており、それ故に異なった結論も出てきて、そこに研究の妙味が生れてくる。目録・解題・索引はいかにも機械的にできそうに見えるが、案外に強く作成者の主観が働くものなのである。だから他人の作った目録・解題・索引で調査研究をしたのでは、他人の主観に動かされてしま

って、個性が失われ、研究の妙味も消えてしまうおそれがある。

この感を私が特につよくしたのは、ニューヘブンのエール大学に近いところで、HRAFなるものの存在を知ったからである。私が見たのは、いわば「極東関係文献の索引」、日本・中国・フィリピンなど、東アジアに関する文献の総合索引である。私がアメリカにいた1955年の段階では、約100冊の文献の索引がつくられていた。索引はパラグラフ毎につけられる。そのパラグラフが何の役に立つか、例えば中国貨幣の調査に役立つと作成者が思えば、中国貨幣をあらわす番号をそのパラグラフにつける。ここまでは普通の索引とちがいないが、特異なのは、番号をつけたパラグラフを複製して、HRAF購入者に送る点である。したがって購入者の方で送られてきたパラグラフを番号にしたがって整理しておけば、忽ちどんな調査でもできてしまう。普通の索引なら原書がなければ役立たないが、HRAFであれば原書を備えその頁を繰ってみる必要はない。その頃でも自然科学の領域ならそんなに珍しいことでないのかも知れないが、私にとってはすごく珍しいものであった。

兎に角、これは便利である。しかしこれで調査研究をしたら、誰がやっても結論は同じになってしまわないか。作成者の意のままの結論が出てくるにちがいない。何だかこれでは学問が毒されるような気がしてならなかった。もっともこれは軍が金を出して作らせていたのであって、一刻も早く結論を得なければならぬ必要が、こういうものを出現させたのであるから、学問とは関係がないといえそうかも知れない。しかし私は、学問的な目録・解題・索引も便利さを次々に求めて行けば、その行きつくところはHRAFのようなものとなるのではないかと思って、いささかゾツとした。

今日の日本はいろいろな点でアメリカと同じようになってきた。学問の領域も例外ではない。私の専門とする中国研究の分野でも、入門書や目録・解題・索引など、便利な道具が、アメリカに劣らないくらいたくさんできてきた。しかしこういう傾向は、個人研究がおろそかにされて共同研究とか総合研究とかいうものもがてはやされ、やれシンポジウムだ、それカンファレンスだと、お祭りさわぎをよしとする風潮とともに、一体、喜んでいいのか悲しむべきか、判断に迷ってし

まう。

物にはすべて表裏の両面があるように、この傾向に喜ぶべき点のあることは勿論であるが、同時に悲しむべき点のあることも事実である。研究の過程においては、共同とか総合とかいうことはあってもいいが、研究は——少なくとも人文科学においては——終局的には個人のものだと思うが、それが忘れられて共同研究だ、総合研究だと騒いでいるとすれば大変だ。他人の作った便利な目録・解題・索引を利用するのはよい。しかしそれはあくまでも参考にするのであって、これに頼り切ってしまうとは、他人の主観に動かされてしまうことになる。ところが便利になればなるほど、人はそれに頼り切る傾向がある。そこに目録・解題・索引類の危険性がある。

こんなことを私がいい出すと、しかし変に思う人がいるかも知れない。というのは、私自身このような目録氾濫の傾向を助長したふしがないわけではないから。少なくとも私が自分自身の研究よりもこの種のものを作成に熱心だったことは、私の業績目録を見れば一目瞭然である。そうすると、学問を毒する恐れのあるようなものを、何故熱心に作ってきたか弁明しなければならぬ。自分の研究に行きづまりを生じ、閑をもてあましてこんなつまらぬことをはじめたと本音をいってしまえばそれまでだが、もう少し体裁をつくらっていえば、時代の先端を歩きたかったのである。

1956年、アメリカからイギリスに移ってみると、自分でお盆をささげ持って食事を運ぶようなキャフェテリア式の食堂は、アメリカに比べると確かにずっと少ない。しかしその少ないセルフ・サービスの店に人は群がっている。これを見て、いわゆる文化人が何といおうと、人は易きにつくものだが、時の流れには逆らえないと、つくづく思った。目録・解題・索引など下らないとさげすんでみたところで、それは老人の寝言、一般の研究者は便利なこれらに拠るにちがいない。それが流れというものなのだ。それなら、そんなものは駄目だといって、時代の後をトボトボと歩くよりも、先頭に立って入門書や目録類を作ってやろうと考えた。毒を知っている人が作れば、それだけ毒の少ないものになるかも知れないと思って。そして自分でやってみて、図書館の仕事が如何に大切か大変かということがよくわかった。

× × ×

東洋文庫近代中国研究室の業績を調べてみると、私の業績より以上に目録偏重の傾向がうかがえる。研究書の出版は十指を屈するに足らないのに、目録の出版は30部にも及んでいるのである。それを刊行の年代順に列挙すれば、次の通りである。

- (1) 中国文化史日本語文献目録(教育・キリスト教) 1955 84 p.
- (2) 東京大学文学部中国文学哲学研究室所蔵近代中国研究資料目録 1955 83 p.
- (3) 中国雑誌論説目録(万国公報・江蘇・浙江潮・湖北学生界・民報) 1955 127 p.
- (4) 李鴻章奏議目録(李文忠公全書) 1955 105 p.
- (5) 盛宣懷・袁世凱奏議目録(愚齋存稿・北洋公牘類纂・同統編) 1955 90 p.
- (6) 左宗棠・張之洞・薛福成・張謇奏議目録(左文襄公全集・張文襄公全集・庸庵全集・張季子九錄) 1956 169 p.
- (7) 経世文編総目録 1956 2 v.
- (8) 経世文編総目録索引 1956 149 p.
- (9) 東洋文庫・一橋大学支那関係青書目録 1956 94 p.
- (10) 東方雑誌目録 1957 167 p.
- (11) 日本主要研究機関図書館所蔵中国文新聞雑誌総合目録 1959 171 p.
- (12) 近代中国関係文献目録彙編 1960 44 p.
- (13) 東洋文庫新収中国文新聞雑誌目録 1961 27 p.
- (14) 東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録Ⅰ 1962 67 p.
- (15) 東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録Ⅰ 1963 204 p.
- (16) 中国関係日本文雑誌論説記事目録Ⅰ(外事警察報・北京週報・燕塵) 1964 240 p.
- (17) 東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録Ⅱ 1965 44 p.
- (18) 東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録Ⅱ 1965 165 p.
- (19) 東洋文庫近代中国研究室中文図書目録Ⅰ 1965 207 p.
- (20) 東洋文庫近代中国研究室中文図書目録Ⅱ 1965 78 p.
- (21) 中国関係日本文雑誌論説記事目録Ⅱ(支那時報・東亞・情報・調査月報・特調班月報) 1965 244 p.
- (22) 「解放日報」記事目録Ⅰ～Ⅲ 1967～68 3 v.

- (23) 東洋文庫別置東アジア関係欧文図書目録 1969 248 p.  
 (24) 中国関係図書目録(和文1957~1970) 1971 189 p.  
 (25) 東洋文庫近代中国研究室中文図書目録Ⅲ 1971 180 p.  
 (26) 東洋文庫所蔵近代中国関係図書分類目録(日本文) 1973 2 v.  
 (27) 東洋文庫別置近代中国関係欧文図書目録 1974 286 p.  
 (28) 東洋文庫所蔵近代中国関係図書分類目録(中国文) 1975~76 2 v.  
 (29) 明治以降日本人の中国旅行記・解題 1980 345 p.  
 (30) 近代中国関係文献目録 1980 635 p.

(3)~(7)(10)(16)(21)(22)は東洋文庫の所蔵する新聞・雑誌・図書の内容目録で、巻に順って目次を集めたものである。(7)にだけは著者索引(8)がある。(22)は中共の機関紙『解放日報』記事の見出しを年月日順に排列したもの、但し外国の記事は省かれている。(24)(30)は蔵書目録ではない。(24)は1957~1970年間に出版された日本文の中国関係図書目録で、十進分類法にしたがい分類されている。(30)はユネスコ東アジア文化研究センターの調査を参考にし、別に刊行委員会をつかって出版したもので、1945~1978年間に日本文で書かれた論文・著書の著者別目録で、索引がついている。総合雑誌の論説・時評の類も含まれている。(29)は、近代中国研究室に別置されている、明治以降日本人の中国旅行記の解題で、排列は旅行の年代順になっている。また近代中国研究室に別置されている図書を、印刷された目録で調べたいなら、(26)(27)(28)によるがいい。(27)は著者別、(26)(27)は十進分類法によって分類されている。

なお『近代中国研究』には、「中国文雑誌論説記事目録」として、

国史館館刊・中国農民・新青年(第2輯, 1958)

清議報・近代史資料・中国農民(第3輯, 1959)

時務報(第5輯, 1963)

商務官報(第6輯, 1964)

の内容目録があり、別に第4輯(1960)には、市古宙三・岡岡妙子編「東洋文庫所蔵近百年來中国名人関係図書目録」がある。

また『近代中国研究センター彙報』に掲載された目録・解題・入門には、次のようなものがある。

陳独秀活動年譜(木村靖子, 2, 1963)

江西ソヴェト関係資料目録(3, 1963)

太平天国史研究論文目録(4, 1964)

日本人の新中国旅行記(4・10・13, 1964・67・70)

近刊辛亥革命史料紹介(6, 1965)

解放日報社論目録(7, 1966)

イエズス会士中国書簡編目(矢沢利彦, 8, 1966)

中国の文化大革命に関する日本雑誌論説目録(8・9・11・13, 1966・67・68・70)

中共党史関係資料目録(徳田教之, 9・10, 1967)

近代中国研究の手びき(市古宙三, 10・11, 1967・78)

東洋文庫所蔵現代中国人詩文集・全集・伝記・年譜目録(12, 1968)

中文論集内容目録(13・14・15, 1970・71・73)

中華人民共和国刑事法関係日本語文献目録(向山寛夫, 14, 1970)

『闘争』(江西)記事目録(八巻佳子, 15, 1971)

五四文学革命文献目録(山根幸夫, 16, 1973)

東洋キリスト教史研究文献目録(吉田寅, 16, 1973)

『近代中国研究センター彙報』は、1973年以来停刊していたが、昨1979年、『近代中国研究彙報』と改題し、創刊号を出した。これには「中国大学学報内容目録」(甘肅師大学報・吉林師大学報・思想戦綫・中山大學学報・武漢大學学報・文史哲・北京師範大學学報・北京大學学報・理論学習・遼寧大學学報)があり、第2号(1980年)すなわち本号には、「近代中国人伝記目録」がある。

× × ×

近代中国研究室出版の目録類をみて第一に気づくことは、そのほとんどが手のこんだものでない、機械的にできる目録だということである。排列が著者名順とか、書名順とか、刊行年順とか、本の内容目次をただ写しただけとかいった種類のものである。こういう単純な、分類もされていない目録を作ったのは、もともと安直に仕上げるためであるが、安直にできる目録が、面倒な分類目録よりも案外に良い点のあるためでもまたある。良い点というのは、前にも述べたことであるが、作成者の主観が入っていないという点である。たとえばいま、『太平天国天王洪秀全の興起とその宗教性』という本があって、これを探そうとする。分類目録だと、これは「歴史」に分類されるか、そ

れとも「宗教」か「伝記」か、人によってちがってくる。「歴史」だと思って「歴史」の部を探しても無い。無いと思ってあきらめたのであるが、実はこの分類目録の作成者は「伝記」に分類していたというようなことはよくある。ところが書名順に並んでいれば簡単にみつかる。そうでなくても分類されていない目録なら、全部みるよりほかはないから、面倒でもいつかは必ずみつかる。そうしてついでに、思いがけない本を見つけることがある。勿論、分類目録でも片っ端からみればいいわけだが、人情の常として分類されていると、それをやらないうで分類に頼ってしまう。面倒な分類をわざわざしてくれた目録よりも、安直にできる単純な目録にいい点があるというのは、こういう点である。もっとも(26)(28)は、この趣旨に反して面倒な分類をしたが、それは周囲の「蔵書目録は分類しなければ使いにくい」という声に負けたからである。確かに、初心者には分類されていなければ困る。ただ分類にまどわされるのを嫌う人のためには、書名索引、著者名索引という形で、見易い蔵書の一覧表を巻末につけた。

第二に気をつく点は、東洋文庫蔵書の、特に近代中国研究室に別置されている図書と、東洋文庫に所蔵されている図書や新聞・雑誌の内容目録が圧倒的に多いということである。これはいうまでもなく、東洋文庫に、特に近代中国研究室にどんな文献があるかを一般の研究者に知らせるためである。しかしそれにしても、東洋文庫の蔵書や蔵書の内容目録なら、東洋文庫へ来ればカード目録があり実物があるのだから、強いて印刷までする必要はないではないか、蔵書目録はまだいいとして、蔵書の内容目録まで印刷するなんて、贅沢にすぎるといふ批判がおこっても不思議ではない。殊に蔵書の内容目録が、さきに述べたように何の手も加えていない、原書の目次そのままのものであるなら、なおさらである。しかしこういう批判があるとすれば、それは研究条件に恵まれている東京の大学の先生方の批判にちがいない。一体に政府も民間も、こういう先生方の面倒はわりあいによくみてくれるが、研究条件に恵まれない人たち、地方の研究者や、高校以下の教諭や一般官庁・会社の人で勤務時間外に寸暇をさいて研究している人たち、あるいは素人だが趣味で研究したいという人たちは、誰も援助してくれない、放ったらかしである。しかし私は、少なくとも

人文科学の領域では、研究成果などどうでもいい、研究すること自体に意義があるのだと考えている。したがって誰でもが何でもいい、自分で研究をしてみるべきであって、その方がカルチャー・センターあたりをうろうろして他人の話ばかり聞いているよりもよっぽどましである。ところがそんなことをいっても、研究施設といえば、ほとんどすべてが特定少数の研究者のためのものであって、さきにあげた研究条件の恵まれない人や素人などが大手をふって自由に研究のできるような場はほとんどない。特定少数の個人の研究を奨励援助する機関があっても勿論いい。同時に、不特定多数の人の研究を奨励援助する機関があってもいいはず、いやなければいけない。東洋文庫の近代中国研究室はそういう役割を果すことを願ってきた。誰にでも、地方の人にさえ、2週間を限って近代中国研究室に別置されている図書(雑誌は貸し出さない)を貸し出しているのはそのためであるが、蔵書目録や、一見下らないと思われる内容目録みたいなものを、研究書に優先させて敢えて印刷刊行しているのも、またそのためである。蔵書目録、内容目録が印刷されていれば、それだけ東洋文庫で調べる時間が節約でき——但し時間の余裕のある人は節約を考えるべきでない——寸暇を惜しんで研究している研究条件に恵まれない人には、きっと喜ばれるにちがいない。

以上、えらそうなことをいつてきたが、実はこれも、できるだけ金をかけず安直に目録を作ってきたものの自慰の駄弁か怨言にすぎない。では何故、そんなに金をかけず安直に作らねばならなかったか。それは、図書や新聞・雑誌をふんだんに買い集め、それを整理して、一刻も早く閲覧に供することが、近代中国研究室にあっては最終の目的であって、目録を作成することはその手段の一つにすぎないからである。